

野 菜

実 況…(27年5月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

2月下旬定植の福井、若狭地区では、6～7段果房が開花開始で5月初旬から収穫開始(昨年より6日遅い)となっている。南越地区のRW栽培は、第8～9段果房が開花期、第3果房が着果期となっている。南越地区の他の栽培では5～6段果房が開花期となっている。なお、5月末から選果場稼働の予定である。

灰色かび病、コナジラミ類が微発である。

(2) ミディトマト

福井、坂井、南越地区の3月中旬定植で7～8段果房が開花期となっており、4～5段果房が着果期となっている。奥越地区では4月16日定植が2～3段果房が開花となっている。

若狭地区の促成長期どり栽培は、24～26段花房が開花期となっている。小果と着色遅延により収穫量はやや減少傾向になっている。

葉かび病、アザミウマ類が微発である。

(3) キュウリ

2月中旬定植の若狭地区、3月中旬定植の福井地区は継続収穫中である。3月下旬定植の丹生地区では収穫開始となった。

灰色かび病が少発、うどんこ病が微～少発、アブラムシ類が中発である。

(4) ハウススイカ

坂井北部丘陵地は、定植の早い作型で4月30日前後から開花開始となり、5月5～7日が開花盛期(昨年より4～5日遅い)となっており、早いもので果径17～20cmとなっている。三里浜砂丘地では、4月22日から開花開始で開花盛期は4月25～30日、生育の早いもので果径は20～22cmとなっている。

ハダニ類が一部少発である。

(5) メロン

プリンスメロンの開花交配は、4月17日～5月上旬にかけて行われ、着果、果実肥大は良好で5月21日から出荷開始となっている。

アンデスメロンの開花交配は、4月末～5月中旬で、早いもので縦ネット発生期となっている。果実肥大は概ね良好である。

坂井北部丘陵地のマルセイユメロンの開花交配は、4月15日～5月初旬にかけて行われ、早いもので縦ネット発生期となっている。果実肥大は概ね良好である。丹南地区では、天候不良で生育が遅れていたが、その後の好天により順調に着果生育している。

アールスメロンは、坂井北部丘陵地で4月25日から開花開始となっている。三里浜砂丘地では5月10日から開花開始となっている。両地区とも昨年に比べ開花始期が2～3日遅れている。

アブラムシ類が少発、つる枯れ病が一部少発である。

(6) イチゴ

県内の高設イチゴは5月上旬でほぼ終了している。継続収穫中のところでも5月までの収穫予定となっている。

ハダニ類が少発、アブラムシ類が一部多発である。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区は、3月下旬～4月上旬播種のハウレンソウを約40～50日で収穫中である。

(2) ダイコン

三里浜砂丘地は、収穫開始が平年より7日遅れの5月6日からとなった。
コナガが微発である。

(3) アスパラガス

福井地区は、26年度に定植した株が3月下旬より収穫開始している。立茎開始となっている。

2 露地野菜

果菜類

(1) ピーマン

丹生地区は4月27日～5月10日に定植され、早いところでは開花開始となっている。福井地区では5月9～13日に定植されている。

(2) スイカ

坂井北部丘陵地はトンネル除去開始が5月20日前後から、三里浜砂丘地では5月15～20日に行われた。生育は平年並からやや遅れ気味となっている。

越前市白山地区では、4月30日から5月15日かけて定植された。

(3) カボチャ

坂井地区は、5月7日頃からトンネル除去を開始しており、子づるは10～11節に生育している。

(4) ナス

奥越地区は4月16日から定植開始で、早いもので草丈50～60cm程度、2番果開花となっており生育はおおむね順調である。

(5) 一寸ソラマメ

若狭地区は草丈100cm程度で摘芯され、5月16日から収穫開始となっている。坂井地区では5月20日から収穫開始となっている。

赤色斑点病が微～一部多発である。

(6) スイートコーン

福井市清水町は、4月22日から順次定植開始で生育の早いもので草丈53～55cm、葉数4.5～6.5枚になっている。永平寺町では、4月25日から順次定植開始で生育の早いもので草丈60cm、葉数7.5枚になっている。

葉菜類

(1) ブロッコリー

3月下旬から4月上旬定植の福井、南越地区は、早いもので葉数9～12枚となっている。4月上～中旬定植の若狭地区では、葉数8～12枚となっている。

黒腐病が局少発、コナガが中発、ハスモンヨトウが少発である。

(2) ネギ

奥越地区の越冬どりは、5月11日からは青ネギ、白ネギ（軟白25cm規格）として

出荷している。5月20日頃から本格的に出荷されている。

さび病が微発、アザミウマ類、ハモグリバエ類が少発である。

水田園芸の秋冬どりは、降雨による悪天候の影響で県内一円で4月定植が大幅に遅れ、4月下旬から定植開始となったところが多くなった。奥越地区では、4月上旬定植が地上部長30～35cmとなっている。3月30日定植の福井地区、坂井北部丘陵地では地上部長23～27cmとなっている。

アザミウマ類が微発、ハモグリバエ類が一部少発である。

(3) キャベツ

坂井北部丘陵地は、5月下旬から出荷の予定である。水田園芸では、結球始期から結球期となっている。

アオムシが少発である。

根菜類

(1) ダイコン

三里浜砂丘地は、5月15日から出荷開始となっている。生育は平年より3～5日遅れとなっている。

(2) タマネギ

福井地区は、草丈80cm、葉数7～8枚、球径7cmとなっている。

坂井地区では、草丈60cm、葉数7枚、球径4cm程度で球茎の肥大が始まっている。

灰色かびが少発である。

(3) ラッキョウ

三里浜砂丘地は、全体に生育量が小さく分球数はやや少なめとなっている。一年掘りは5月21日から収穫開始となっている。なお、3年子は6月7日から出荷予定となっている。

(4) カンショ

坂井地区で4月末から定植開始となっている。丹生地区では4月下旬から5月中旬にかけて定植された。

(5) サトイモ

奥越地区は、4月上旬に定植したものが5月15日から出芽始め、葉数1～3枚となっている。

(6) ニンジン

三里浜砂丘地は、生育の早いもので本葉9枚、草丈25cmとなっている。

坂井北部丘陵地では、生育の早いもので本葉6枚、草丈20cmとなっている。

(7) ニンニク

永平寺地区は、草丈80cm、生葉数7～8枚、球径5cmで平年並みになっている。

さび病が一部少発である。

(8) ショウガ

福井地区は、4月24日から順次定植されている。

対 策

5月は、比較的天候に恵まれたため、定植時の低温による生育の遅れも回復し、生育は順調に経過している。ただし、例年より害虫の発生が早まっていることから早期発見、早期防除に努める。

これから梅雨時期に入ると曇天が続く、草勢も軟弱になりやすく病害も多発しやすくな

る。また、降雨が続き土壌水分が過多になることで根群が衰弱し草勢の低下を招きやすくなる。更に、急激な土壌水分の変化は、果菜類の食味低下や裂果を発生させる要因となり、品質、収量低下の原因となる。これらのことから、梅雨入り前には、再度排水対策を徹底するとともに、ハウス換気に留意し、また、草勢を見ながら整枝、摘葉、摘芯、追肥、防除等の適正な管理を行なう。

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

上段果房の肥大期となるので、土壌水分を確保し、込み合ったところの葉を摘除または剪葉する。換気を十分にすることでハウス内の気温や湿度を下げ、養分消耗の抑制と葉かび病、灰色かび病等の発生防止に努める。また、土壌水分の急激な上昇は裂果の原因になるので、ハウス周囲の排水溝を整備して降雨等の浸透を防ぐ。

(2) ミディトマト

日照不足と夜間高温が続くと糖度の上昇が悪くなるので、ハウス換気とともに込み合っているところでは摘葉を行う。かん水を控えめにすることで糖度の上昇を促進させる。しかし、水田地帯のハウスでは周辺水田からの入水や多雨続きによる地下水位の上昇が糖度低下や裂果の原因となるので、ハウス周囲の排水溝等を整備し、ハウス内への入水を防ぐとともにハウス内土壌の乾燥に努める。更に、病害虫の発生時期と重なるため、葉かび病、灰色かび病、オンシツコナジラミ、アザミウマ類等の防除を徹底して、健全葉を維持し、草勢や果実品質の低下を防ぐ。特に、アザミウマ類は金粉果の発生原因やトマト黄化えそウイルスを媒介するので注意する。なお、トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミにより永続的に伝搬されるので、防虫ネットの設置による侵入防止と発生初期の徹底防除を図ること。

抑制栽培は、高温期の植付けになるため、植付け前に十分かん水して土壌水分の確保と適切な遮光（高温乾燥回避）による植物体温の低下を図り活着を促進する。高温乾燥が原因で活着の遅れや極端な茎葉の萎れは、落花や上段の花数減少の原因となるので適宜にかん水し、遮光資材、塗布剤等を利用し、遮光率を40%以下となるようにする。また、遮光することで、裂果の軽減も期待できる。特に、プラグ苗を定植する場合、一回限りの過度のかん水は上根中心の草姿になりやすいことから、活着するまでは根が地下深く伸長するように、手かん水等でこまめなかん水管理を実施する。

(3) キュウリ

草勢が急激に低下すると曲がり果や尻細り果等が多くなるので、着果量を考慮しながら追肥やかん水により草勢維持を図る。また、親づるの摘葉、子づるや孫づるの整枝等を行って日当たりや通風を良くするとともに、ハウス換気を十分に行うことで生育の安定と灰色かび病やべと病等の発生防止に努める。なお、摘葉は1度に多くの葉を摘除すると草勢を低下させるので、1回当たり2枚程度までとする。

(4) スイカ

玉の肥大促進のため、開花後25日間程度は土壌水分を確保するが、その後は糖度上昇を促進するためかん水は控えめにする。しかし、極端な草勢低下は食味を悪くするので、収穫期までに著しく草勢が低下しないよう適宜かん水を行う。

また、果実の肥大盛期を過ぎて再びつる先に着果を確認した場合、収穫する果実の肥大や品質を低下させるので必ず摘果する。さらに、収穫の2週間程度前には玉直しをして果実底部の着色を促すとともに、病害虫防除を行って健全葉を確保する。

(5) ネットメロン

ネット完成期以降の養水分過剰は、2次肥大による稜角果や微細なネットが発生する原因となる。また、収穫前の土壌水分過剰は糖度不足や裂果の原因になるので、かん水は控え目にする。しかし、極端な土壌乾燥も石灰吸収抑制や草勢低下による発酵果の原因（低温が続く場合も発酵果の発生を助長する）となるので注意する。なお、草勢低下につながるつる枯病、菌核病等の防除は事前に対処しておく。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

ハウレンソウ等は高温によって急激に生育が進むため、収穫遅れにならないよう計画的な収穫に努める。なお、これから播種する場合は、高温や日照不足によって徒長しやすくなるので播種密度を下げるとともに、換気を十分に行い多かん水は避ける。また、高温での栽培のため収穫適期幅が狭くなるので段播きを徹底する。

2 露地野菜

果菜類

(1) スイカ

梅雨入り前の6月上旬までに一斉着果させること。着果後は早めに追肥を行い、かん水量を増やして果実肥大を促す。着果が梅雨に入る場合は、花が雨に遭わないようにトンネル等で雨よけをしながら着果を促す。また、ソフトボール大になったら果形の良いものを2つに1果を残し、後は摘果し着果標識を立てる。さらに、着果後は根群発達が悪くなって収穫前の急激な草勢低下や病害を発生させやすくなる。このことから、着果節位よりつる先の側枝を放任して根群の維持を図るとともに、つる枯病等の病害防除を徹底し草勢維持を図る。

(2) ナス、ピーマン

収穫開始頃から追肥を始めるとともに、土壌水分を確保して、草勢の維持と果実品質の向上に努める。特に土壌水分の不足は、果実肥大を悪くするだけでなく、日焼け果や尻腐れ果の発生を助長するので、畦間（通路）が常に湿っている程度とし、必要に応じかん水を行う。また、梅雨から盛夏を越えて秋まで長期に栽培されるナスやピーマンは根群の健全化が特に重要であり、肥料切れをしないように追肥をするとともに排水対策を徹底する。さらに、病虫害防除を徹底して健全葉の維持確保に努める。

(3) キュウリ

初期生育確保のため主枝は7節目位から着果させ、収穫始め頃から追肥を行う。梅雨期に入るとべと病が発生しやすくなるので、込み合ったところの摘葉を行って通風を良くするとともに予防散布を徹底する。なお、耕種的防除として、稲ワラなどによるマルチも雨による泥はねを防ぎ病害の発生を軽減させるため利用する。

(4) カボチャ

親づるでは12～15節、子づるでは8～10節に着果させるので、着果節位までの側枝や雌花は早めに除去する。また、開花期に訪花昆虫が少ない場合は午前9時頃までに人工交配を行う。1番果の着果が確認されたら次の果実は摘除する。果実が野球ボール大になった頃の草勢が弱くつる先が立っていない場合には、つる先付近に追肥を行う。

(5) イチゴ

親株は発生したランナーを20cm程度の間隔に配置する。土が乾燥するとランナー

の発生が悪いので、必要に応じて適宜灌水を行う。ハダニ・アブラムシの防除を徹底する。薬剤抵抗性を回避するため同一系統の薬剤を連用しない。

葉菜類

(1) ネギ

草丈や葉鞘茎の伸びを確認しながら、天候を見計らい適宜追肥、土寄せ作業を行う。梅雨入り前に、圃場周辺の排水対策を再確認するとともに、軟腐病、白絹病対策として粒剤の散布を必ず行う。

いも類

(1) サトイモ

6月中旬頃から子いもが着生し始めるので、覆土が浅い場合は土寄せを行い、過剰な子いもの着生を押さえて肥大を促す。また、アブラムシやハダニの防除を行い、健全葉を確保する。

(2) カンショ

植付けが遅れると地温が上がりすぎていもの形成が悪くなるので、6月中旬までに定植を終える。また、定植は曇天や夕方行い、株元に土を置いて萎れた葉がマルチに接しないようにする。

3 梅雨入り前および梅雨入り後の管理

(1) 草勢維持

- ア 하우스回りや圃場周囲の排水溝、圃場内の畝間を整備し、雨水が速やかに排水し、圃場内や畝間等に滞水しないようにする。
- イ 草勢、葉色、果実肥大速度等をみながら適宜追肥を行う。
- ウ 夜間が高温となる時は、換気を十分に行って呼吸による養分消費を抑制する。
- エ 整枝、摘葉等により採光を良くする。

(2) 病虫害防止

- ア ハウスの破損部分を早急に補修し、雨漏りによる作物への濡れを防ぐ。
- イ 暴風雨時は、ハウスを閉めて雨が吹き込まないようにする。
- ウ 整枝、摘葉等は晴天日に行い採光、通風を良くする。
- エ マルチや敷きワラをして雨による作物への土の跳ね上りを防ぐ。
- オ マルチ上に水溜りができる場合には、穴を開けて排水する。
- カ 雨が続く場合には、雨の止み間をみて病虫害の予防散布を行う。